駅から ぶらり旅

文＝伊藤哲也
写真＝亀卦川 英樹

宿のある高台から、夕暮れの利尻富士（りしりふじ）を遠望した。手前は天売港。

◎第一一三回 深川駅から羽幌町へ

夏が呼んでいる。久しぶりに天売島に来ないか、と。さっそく深川駅からレンタカーを借り、日本海側へ走り、国道二三一号（通称オロロンライン）を北上した。曇天に鈍く光る日本海。窓を開けると、潮の香りが漂ってきた。

羽幌港フェリーターミナルに着き、船上の客に（※）。一時間三十五分の旅だが、天気が回復し、少しずつ海が青さを増している。途中の焼尻港では数羽のウミウが長い首を伸ばして、岸壁に佇んでいた。

「海上の衆鳥敢えて飛ばず」（海の上を鳥たちはあえて飛ぼうとしない）などと、思わず漢詩の一節を口ずさむ。船旅は物思いにふける時間もくれる。

天売港に着くと、「島の宿大一」の主、佐賀大一さんが迎えに来てくれていた。宿に荷物を置き、近辺の散策へ出ると、焼尻島へ向かうフェリーが白い波を残して進んでゆくのが見えた。近くの草むらから、さかんに鳥の鳴き声がする。ノビタキだろうか。ただそれだけのことなのに、気持ちがほぐれてゆく。これが島時間なのだろう。間もなく夕食の時刻である。

一番いいコースにしたのだが、これが豪華だった。ぷりぷりで甘みあふれる生ウニ。もう一品、蒸したウニもある。これもまた甘い。早々にビールを切り上げて、日本酒（増毛町の国稀酒造の冷酒）にする。続いてアワビの造り。これまたコリコリと歯ごたえ

（左）色艶、ボリュームの素晴らしい生ウニ。（上）潮の香りが鼻をくすぐるアワビ。 ●島の宿大一／苫前郡羽幌町大字天売字弁天39 ☎01648・3・5111。チェックイン14:00、チェックアウト10:00。1泊2食付き2名1室ひとり8,800円、11,000円、13,200円の3コース（料理による）。営業期間は4月下旬から11月末まで（要問い合わせ）。

（※）羽幌港から天売島・焼尻島へ渡る船には、フェリー（車も可）と高速船（乗客のみ）の2種類がある。

記事の内容、表示金額は取材日（2024年6月13・14日）時点のものです。予告なく営業時間の変更や休業、商品の販売中止などの場合があります。ご利用の際は予めご確認ください。表記の金額は全て税込みです。

ヤリイカの煮付けはおふくろの味。日本酒にもごはんにも、よくあった。※魚介類は漁期、漁模様により、地元産ではなく北海道産になる場合がある。

造りの3点盛り。白身のヒラメがとろけるようだった。

が軽快だ。数年ぶりに活アワビの蒸し焼き（陶板ステーキ）も食べ、頬が落ちそうになる。

さらにホタテ、甘エビ、ヒラメの造り、ホタテ焼き、煮ツブ、ヤリイカの煮付け（八月は別メニューに変更予定）など、海の幸のオンパレード。時間をかけてきたかいがあったと、納得したものであった。

静寂のただ中で深い眠りに落ち、翌朝、車で時計回りに島内一周（約十二キロ）のドライブへ。時間のある人は、レンタサイクルで回るのもお薦めである。

まず島の中心部にあるフットパス「花鳥の径」へ向かった。

フットパスは緑のトンネル。草木の匂いにあふれていた。まるで楽園への道である。

エゾマツやトドマツなどの針葉樹と、カエデやシラカバなどの広葉樹が入り混じる針広混交林の中にウッドチップが敷き詰められた小道が続く。ふわりとした踏み心地に、足取りも軽い。ちらほらと花も見られ、オオウバユリやテンナンショウ（別名マムシグサ）などが目に入った。

どこからか、キツツキ類が木をつつく音がする。ノゴマのさえずりも聞こえる。そのほか、多くの野鳥たちが美声を聞かせてくれ、天然の交響曲を堪能した。

フットパスでさえずっていたノゴマ。

フットパスにはいくつか案内板があり、途中の分岐点で出発点に戻ることにした。歩いたのは、およそ一・三キロだが、四十五分かけて、たっぷり森林浴ができた。

車に戻って、黒崎海岸へ。ここはウミネコの繁殖地になっており、大集団で賑わっている。近づいても、幼鳥のそばを離れない親鳥もいた。

続いて赤岩展望台。断崖絶壁の海岸は、海鳥たちの一大繁殖地だ。ウトウが地面に掘った巣穴が、あちこちにある。断崖を見下ろす展

黒崎海岸で見たウミネコの親子。

（上）断崖で繁殖しているハヤブサ。海鳥を狙っているのだろう。
（右）ケイマフリが飛び立とうとしていた。赤い脚がよく目立つ。

望台から、ケイマフリが岩の上にいるのが見える。

ウトウやウミウが海上に浮かび、時に潜り、アマツバメが青空を切るように飛んでいる。ウミガラス（オロロン鳥）の姿もあった。ハヤブサが猛スピードで滑空していく。まさしく野鳥の楽園である。双眼鏡があれば、いっそう楽しめるに違いない。

ここからさらに海鳥観察舎、観音岬展望台（アマツバメが多かった）と、海岸美を堪能した。見るもの、聞くものに心を奪われているうちに、島時間は流れ、再びフェリーで羽幌港へ戻った。

赤岩展望台は海鳥や風景の絶好の撮影スポット。

北海道海鳥センターでは、天売島で繁殖している海鳥の展示が見られる。ご案内いただいた越宗菜保美（こしむねなおみ）さんは、「天売島は断崖絶壁があることに加え、キツネがいないなど捕食者が少ないことで、海鳥の繁殖に適した環境が保たれています」と教えてくれた。

館内には「さえずりや」というコーナーがあり、野鳥のさえずりを聞くことができる。ノゴマを聞いてみると、「ピィチョロ、ピィチョロ、リリリリ」と、可憐な声が流れてきた。

十三分ほどのビデオでは、天売島の海鳥の生態や保護活動の様子が見られる。ウトウの繁殖地としては世界最大で、約八十万羽と推測されているという。

海鳥たちの大半は子育てが終われば、島を去る。彼らの旅がいつまでも無事に続いてほしいと思ったものだった。 Ⓙ

夏の日差しに、ひときわ鮮やかなエゾフウロ。
観音岬展望台の近くで。

北海道海鳥センターの展示。ウミガラスなどの解説パネル、ビデオ、野鳥のさえずりの音声など、さまざまに楽しめる。ここではウミガラスの調査、研究、保護活動も行っている。

北海道海鳥センターに隣接しているはぼろバラ園。訪れたのは咲き初めた頃だった。

●北海道海鳥センター／苫前郡羽幌町北6条1丁目1-1 ☎0164・69・2080。9:00～17:00（11月～3月は16:00まで）、月曜、祝日の翌日、年末年始休、無料。